

片腕の先生

— 今わかる先生の思い

外国語学部世界教養学科教授 菊地俊一

もう四十年前も前、私が大学二年生の時のことである。片腕の先生がいた。応用言語学の先生だった。なぜその先生が腕を失ったのか、当時の私は気にすることはなかった。

大学を卒業し十二年が過ぎた一九九二年、偶然にもその先生と東京で再会し、それから交流が始まった。先生は筑波大学から放送大学に異動されていた。再会からしばらくして大きな封筒が届いた。先生は京都の伝統ある某大学に新学部を創ることになったとのことだ。新聞記事も何種類か同封されていた。先生は一九四五年の沖縄戦に少年兵として参加し、アメリカ軍の艦砲射撃を受け、左腕を失ったことを知った。その時の先生は十五歳だった。

終戦とともに先生は英語の猛勉強をし、琉球大学に勤めた後、ハーバード大学へと進学し博士号を取得された。ノースイースタン大学、ハワイ大学でも教鞭をとられ、ハワイではドナルド・キーン先生とも親交があった。NHK教育テレビの英語会話の講師もされた。

私は恐る恐る先生に尋ねたことがある。「アメリカが憎くないのですか。

敵国のことばをなぜ勉強しようとしたのですか」と。メガネの奥の目が少し戸惑った様子の先生は、「ああいう時代だったからね、仕方なかったのだよ。憎むという感情よりも、どうして戦争をしないとイケなかったのか、その理由を知りたくて、相手のことをもっと理解しようと思って、それで英語を勉強したんだ」。それがその時の先生の返事だった。

その後私がボストンに留学中も、社会人として大学院に通っていたころも、先生はいつも応援してくださった。あることで先生に相談したいことがあり、手紙を書き終えた翌日、訃報が届いた。二〇〇三年八月末のことだった。体調を崩されていたことは知っていたが、急なことだった。その日の朝、ペランダの窓のレースカーテンが風でふわっと浮かび、私の頬をなでた。それで私は目がさめた。なんだか先生が来てくれたような気がして、しばらく放心状態になっていた。先生は今、滋賀県大津市で眠っている。

戦後七十年の二〇一五年、私は戦争をとても身近に感じた。二〇一一年の東日本大震災がわが身に降りかかったからだ。相手が戦争か自然災害かの違いはあるが、何の罪もない国民が犠牲になり、一瞬で街が廃墟となったことにおいては似ている。しっかりと「さようなら」を言うこともなく家族と別れてしまったことも似ている。

二〇一五年四月、本学に「世界教養学科」が誕生した。設置準備委員の私は、新学科の夏の海外研修としてニューヨークでの研修を提案した。治安上の理由で、すぐには本学からの承認を得られなかったが、私はその研修の構築に二年の月日をかけ、現地との交渉を行っていた。ニューヨーク市立大学を本拠地とし、グローバルリーダーとしての礎を築くための授業を受講する。市内研修ではコロンビア大学や特色ある小学校を見学し、目玉のひとつが国連本部での研修だった。新入生の関心は極め

て高く、募集定員二十名に対し三倍弱の応募があった。

学生への出発前ガイダンスが始まった五月のある日、私は東京都内の小さな公園にいた。そこは吉田松陰が処刑された小伝馬町牢屋敷跡である。ペリー艦隊の黒船が日本にやってきたとき、まだ鎖国中のわが国にあって国禁を犯してまでも松陰は外国に行こうとした。自国を守るには異国を知る必要があると思っただからである。結局一八五四年のその密航は失敗し、後の安政の大獄で処刑されることとなる。このときの松陰のような覚悟が本当に私にあるのか、それを確かめるために、私はその公園を訪れたのだ。

松陰と同様、私は「国禁」を犯そうとしていた。学生の安全確保のため、法人や国際交流部から、過去にないほどの多くの規制がニューヨーク研修にかけられた。当然の指示である。しかし私はその命令をすべて受け入れることはできなかった。ニューヨークの街の裏路地を、独り歩きして初めてわかる「教養」があることを知っていたからだ。街で迷子になり、泣きそうになるくらい心細くなって初めてわかる「教養」があるからだ。それは、世界教養学科の学生だからこそ、肌で感じてほしい「教養」である。教科書には載っていないのだ。

とはいっても、私がどこまで本気なのか、最終確認する必要がある。大都市ニューヨークは、こちらの接し方によっては天使にも悪魔にも変身する街だ。参加学生二十名を本当に守れるのか、もしもの場合、自らの命と引き換えに学生を守るだけの覚悟が本当に私にあるのか、「国禁」を犯した罪でたとえ私が追放されようとも、そこまでして本当にニューヨークに学生を連れて行きたいのか、とことん自分を追いつめ、自分と対話しながら覚悟を決めた。「君の志は何ですか」と、松陰の声が聞こえようような気がした。

アメリカがくしゃみをすれば日本は風邪をひく。良くも悪くも日米の関係はそれほど密接だ。しかし、アメリカに迎合したくてニューヨークに行ったのではない。受入れ先のニューヨーク市立大学の創設者タウンゼント・ハリスは、伊豆の下田で日本初のアメリカ総領事となった人物である。今もなお日本がアメリカにノーと言えないのは、ハリスが関わった日米修好通商条約に端を発しているという人もいる。本当にそうなのか、日米の関係をその原点にもどって、冷静に考えるきっかけを学生に与えたかった。

もっと重要なことでは、広島、長崎に投下された原爆の研究開発に、コロンビア大学の物理学者も関わっている。マンハッタン計画の一環である。そのコロンビア大学のキャンパスを私たち研修団は歩いた。戦後生まれの私たちにとって、過去にここでそうしたことがあったことを、恨みからではなく、事実として覚えておくべきだと思ったからである。

安倍総理が戦後七十年の談話を発表した八月一四日、私たちニューヨーク研修団はマンハッタンの南にあるスタテン島にいた。そこには日本人建築家がデザインしたPostcardsと題するモニュメントがある。二〇〇一年九月一日の同時多発テロ事件で犠牲になった方々を追悼する記念碑である。あの日崩れ落ちたワールドトレードセンタービルの跡地に、復興のシンボルとして全米一の高層ビルが完成した。完成まで十三年かかった。その新しいセンタービルを見学した私たち研修団は、世界平和と東日本大震災後の復興を記念碑の前で祈った。研修の最後にその地を選んだのは、「これから世界とどう関わっていききたいのか」という学科設立のねらいを、にぎやかなマンハッタンを離れ、心を落ち着けて学生に考えてほしかったからである。

法人、本学、ニューヨーク、それぞれから全面的な支援と協力を得て、

最大限の安全管理の下に実施された研修は大成功だった。学生は行く先々で、小さな親善大使としての役割を十分に果たした。国連本部で独自の主張を英語で述べたときの、ひとりひとりの誇らしげな顔が忘れられない。「人種のるつば」「サラダボウル」と称される大都市ニューヨークで、重厚な世界観を養いながら見聞を広めた学生たちは、帰国後の勉学に一層拍車がかかり、長期留学へと夢を広げ、学科の行事にも積極的に参加している。新学科の学生であることに付加価値を与えた有意義な研修であった。

国際化といえながら、日本の国際化はアメリカ化することと同義になっていると批判する人がいる。小学校低学年から英語教育が導入され、英語圏の文化が一番すばらしいものであるかのような教育がなされ、社会は英語帝国主義に傾いていることに警鐘を鳴らす人もいる。ニューヨーク研修はこうしたアメリカ一辺倒の世界観を見直し、英語以外の言語の必要性を感じるための研修でもあったのだ。「世界にはいろいろな人がいるね。世界にはいろいろなことばがあるね。だから勉強するっておもしろいね」。それをわかっただけで私はニューヨークを選んだのだ。諸般の事情で、二〇一六年度のこの研修は中止となった。

昨年からニューヨークのブロードウェイで上演されている *Alligance* (『忠誠』) がまもなく終わる。日系アメリカ俳優ジョージ・タケイが日系人強制収容所での様子を演じている。ベトナム戦争時のサイゴンを舞台とした *Miss Saigon* で主演だったレア・サロンガも共演している。折しもアメリカでは大統領選挙の予備選が始まった。移民排斥を声高に叫ぶ候補者に招待状を送り、座席を確保しているとのことだ。戦争を知らない私が軽々しく言うべきではないが、戦争を知らないからこそ、だからこそ、薄っぺらなグローバル人材の育成をしないために、過去を知り、今を考え、そして未来を創っていく、そうしたことのできる人材を育てた

いのだ。異文化に住む人々を、互いの恩讐を超えて愛し、ともに生きて行ける、そうした心優しい若き教養人を。

私は今、もう一度、片腕の先生に尋ねてみたい。「アメリカが憎くないのですか？」と。

(きくち としかず)